様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７２０１０１

研究課題名（和文）近世和学の史的展開と文化的実践――１８世紀を中心に――

研究課題名（英文）Researches on the history and practices of Wa-Gaku(a Japanese classicism) in the 18 th century

研究代表者
一戸　渉（ICHINOHE, WATARU）

慶應義塾大学・斯道文庫・准教授

研究者番号：２０５９７７３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,600,000円、（間接経費）　780,000円

研究成果の概要（和文）：〈和学〉とは近世期の日本に発生した、日本の古き文物をめぐる学問および、その学問に基づいて行われた文芸創作をも含んだ、多様な実践のことを指している。本研究では、さまざまな機関が所蔵する一次資料の調査と研究とを通じて、18世紀日本における〈和学〉という知的実践の史的展開を総合的に解明しようとしたものである。本研究の成果として、近世期の和学者たちの知的な交流のありようや、伝記に関する新たな知見を多く得ることができた。

研究成果の概要（英文）：The term "Wa-Gaku" means Japanese classicism about research works and literally actives in the Edo period. This study aimed at searching and analyzing unpublished materials in various archives, and investigating the history of Wa-Gaku in the 18th century. Through these, I got much original information about intellectual network of the scholars in the pre modern era and their biography.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：和学　国学　好古　有職故実　和歌　橋本経亮　藤貞幹　荷田春満

１．研究開始当初の背景

〈和学〉とは、近世日本に発生した本邦の古き文物をめぐる学的考究と、それらに基づいて行われた歌文・物語・書画の創作などの実践一般を指す。これは単に〈漢学〉と区別した用法であって、それ自体は排外的なものではない。すなわち〈和学〉とは、近世日本における知の半面であり、もう半面の〈漢学〉と相補的な関係にある。

一方、おおむね明治 30 年代を境に用語上の定着を見た「国学」は、日本における文献学・哲学における先駆的業績としての評価を与えられ、日本文学及び思想史・歴史学の分野からの研究の蓄積がある。しかし、「国学」という用語のもとに、明治期から戦前にかけて積み重ねられた多くの研究は、実証性は備わっていたにせよ、〈漢〉への抵抗というナショナリズムの一形態としての面に考察が偏していたことも否定できない。戦後の研究にしても、多くはそこへの反動から出発している。結果として、幅広い視角から狭義の「国学」を含み込んだ〈和学〉の営為を見通そうとする試みは、ようやく近年になって登場してきた段階である。加えて、神道史や歴史学の分野においても 19 世紀を対象とした研究の進展が近年見られる。だが、近世日本の学知を規定していた〈和学〉の営為を、広く展望しようとする試みは未だ登場していない。旧来的な「国学史」を相対化し、近世という時代に即した〈和学史〉を構想してゆくことが、近世日本に関する新たな研究上の展開を促すものと考え、本研究の着想に至った次第である。

２．研究の目的

以下の（１）（２）の二つのテーマを掲げて研究を進めた。

（１）18 世紀日本における契沖・荷田春満・賀茂真淵の受容と展開の解明

大坂の真言僧である契沖(1640-1701)、洛南伏見稲荷社の祀官荷田春満(1669-1736)、江戸で田安徳川家和学御用を務めた賀茂真淵（1697-1769）といった、これまでにも研究の備わる人物の持った影響力は、近世期を通じて、決して看過し得ない。とはいえ、これまで彼ら個人の業績や言説についての研究は盛んであったが、それが後の世代によってどのように受容され、いかなる展開を見せたのかについては、副次的な問題とされてきた。彼らは確かに多くの業績を残したが、その大半は生前に公刊されることはなかった。写本の形で限定的な範囲で回覧・転写されるに過ぎなかったそれらの業績が、書肆の取り扱う商品として盛んに出版され、また写本の流通範囲が劇的に拡大し出す時期は、ようやく 18 世紀も後半期に入ってからのことである。上記した問題意識に基づき、本研究では 18 世紀日本における契沖・荷田春満・賀茂真淵の受容と展開について解明を進めることを第一の目的として設定した。

（２）18 世紀の和学者における〈古今〉認識と文化的実践の解明

和学者の多くは、近世社会という彼らにとっての〈今〉において、いかにして〈古〉を再生するかに意を用いていた。それは単純素朴な古代への憧憬では決してない。〈古〉と〈今〉との双方を見据えた上で行われた近世和学の営為は、古典・古代・有職故実などについての学的考究のみならず、和歌や和文、物語、紀行、狂歌、書画といった創作活動から、好古趣味に基づく調査収集活動など、当代の文化・学芸全般に深く浸透している。本研究では〈和学〉を 18 世紀日本における知的現象として捉え、そこに参与した諸人物の思想・言説・伝記・人的交流を総合的に検討し、彼らの〈古〉に向けられた多様な関心とそれに基づく文化的実践とが、近世という〈今〉といかなる関係を取り結んでいるのかを解明することを第二の目的として設定した。

３．研究の方法

以下の二つの方法論にもとづいて研究を進めた。

（１）国内外の所蔵機関等での文献資料調査を中心にそれ以外の関連資料（書画・器物・碑文など）をも用いた学芸史研究。

（２）板本及び写本に関する諸本研究、書物の出版・流通論をも含む広義の書誌学的考究。

４．研究成果

先に「研究の目的」項に掲げたテーマに即して本研究の主要な成果を整理する。

（１）18 世紀日本における契沖・荷田春満・賀茂真淵の受容と展開の解明

荷田春満は、賀茂真淵の師として、〈国学の祖〉との評価を受けて来ているものの、従来その学問が真淵以外に、あるいは真淵以降、どのように継承されてきたかの全体像は曖昧であった。そこで荷田御風や沢田東江、雀部信頼などの江戸の和学者・歌人たち、また大西親盛、小沢蘆庵、上田秋成などの上方の和学者たちによる春満学の受容と展開について跡付け、更に羽倉訓之という 19 世紀初頭に活動していた人物が、春満学の継承者であることを自称しつつ行っていた諸活動を跡付け、伝記的な事実を解明した。以上の成果は、論文「羽倉風のゆくえ」（『朱』第 55 号、2011 年 12 月、単著）として公開した。

更に、荷田春満の江戸での活動拠点であった神田明神の祀官、及びその周辺の歌会を軸とした文雅上の交流実態について検討を行い、従来の江戸歌壇史研究において、分断されているものとして把握されていた、神官らを軸とする古学派歌人と、武家を軸とする堂上派とが、春満の周辺において、近接していた事実を解明した。以上の成果は、日本近世文学会平成 25 年度秋季大会での単独での口頭発表「享保期江戸歌壇と神田明神」（於三重大学、2013 年 11 月 17 日）、および公開学術研究集会「國學院大學の国学研究の現在」での単独での口頭発表「和歌史上における荷田春満の位置」（於國學院大学、2014 年 2 月 8 日）において公表した。当該研究発表については、2014 年度中に論文化し、日本近世文学会の学会誌である『近世文藝』に投稿する予定である。

以上、本テーマに関しては、荷田春満とその門流の展開についての解明を重点的に行ったが、これは従来の研究でも最も手薄な部分であることが理由である。結果として、特に契沖に関しては、当初の計画照らして充分な検討を行うことができなかったため、今後と課題としたい。

（２）18 世紀の和学者における〈古今〉認識と文化的実践の解明

18 世紀後半の上方の和学者である上田秋成に関して、新出資料である京都府立総合資料館蔵「自像筥記」を紹介・翻印し、更に、同資料の分析から秋成の学問観と自伝との関連性について知見を得た。以上の成果は、「「自像筥記」異文――秋成と自伝――」（『上方文藝研究』第 8 号、2011 年 6 月）の論文として公表した。また、秋成は晩年に『春雨物語』という、彼の古学への知識を色濃く反映した物語集を遺している。同書所収の「血かたびら」「海賊」「歌のほまれ」の三編について、注釈及び評釈を行い、秋成の学問と文芸創作との関連性について知見を得た。以上の成果は井上泰至・一戸渉・三浦一朗・山本綏子共編『春雨物語』（三弥井書店、2012 年 4 月）として公表した。

18 世紀後半は、日本の古代の文物へと関心を寄せる好古家と呼ばれる知識人が多数登場した時代でもある。近世京都におけるその代表的な人物に藤貞幹、そして彼の門人格である橋本経亮がいる。まず藤貞幹については、近世から現代に至る彼をめぐる評価の変遷を跡付け、貞幹に関する否定的な評価の淵源が、同時代の本居宣長周辺と江戸の考証学者らにあることを明らかにし、その上で新たな藤貞幹像を描くことを目指した。以上の成果については、「「偽証家」藤貞幹の成立」（『アナホリッシュ国文学』第 3 号、2013 年 6 月）の論文として公表した。橋本経亮に関しては、新出の和歌集の翻印・紹介し、更に同資料から判明した経亮と同時代人との知的交流の具体像を明らかにした。その成果は「橋本経亮の歌文資料――『丁巳詠草』解題と翻印――」（『上方文藝研究』第 10 号、2013 年 6 月）の論文として公表した。加えて、経亮が寛政 11 年に実施した尾張及び伊勢への訪書旅行の実態を、新出資料である東京大学総合図書館蔵『尾勢展観目録并抜粋』に基づいて解明し、そこから特に近世期の真福寺文庫の蔵書管理状況に関する知見を得た。以上の成果は「橋本経亮と真福寺文庫―『尾勢展観目録并抜粋』考―」（『斯道文庫論集』第 48 輯、2014 年 2 月）の論文として公表した。

以上、上田秋成及び藤貞幹、橋本経亮を主たる検討の対象として成果を発表してきた。特に橋本経亮に関しては、先行研究が手薄であり、本研究を基盤としつつ、更に今後の研究の進展によって、近世和学の実像解明に大きく寄与するものと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　９件）

１）一戸渉、「橋本経亮と真福寺文庫―『尾勢展観目録并抜粋』考―」、『斯道文庫論集』、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、査読無、第 48 輯、pp.145-181、2014.02

２）一戸渉「見ぬ世の他者―秋成門人越智魚臣資料拾遺―」、『国文研ニューズ』、国文学研究資料館、査読無、N0.34、pp.6-6、2014.01

３）一戸渉、「「偽証家」藤貞幹の成立」、『アナホリッシュ国文学』、響文社、査読無、第 3 号、pp114-122、2013.06

４）一戸渉、「橋本経亮の歌文資料――『丁巳詠草』解題と翻印――」、『上方文藝研究』、上方文藝研究の会、査読有、第 10 号、pp55-71、2013.06

５）一戸渉・高橋悠里、「最末期の金沢蕉門―東榮松氏所蔵宮森北葉関係俳諧資料をめぐって―」、『金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇』、金沢大学歴史言語文化学系、査読無、第 5 号、pp21-42、2013.03

６）一戸渉、「金沢大学日本語学日本文学研究室所在古典籍目録稿」、『金沢大学国語国文』、金沢大学国語国文学会、査読無、第 38 号、pp75-87、2013.03

７）一戸渉、「羽倉風のゆくえ」、『朱』、伏見稲荷大社、査読無、第 55 号、pp16-35、2011.12

８）一戸渉、「板本を写すということ―『林の秋ぬきがき』『かきねの小草抜書』瞥見―」、『お舟津さん』、舟津神社、査読無、第 14 号、pp7-7 、2011.12

９）一戸渉、「「自像筥記」異文――秋成と自伝――」、『上方文藝研究』、上方文藝研究の会、査読有、第 8 号、pp73-81、2011.06

〔学会発表〕（計　６件）

１）一戸渉、「和歌史上における荷田春満の位置」、公開学術研究集会 「國學院大學の国学研究の現在」、國學院大学　　、2014.2.8
２）一戸渉、「享保期江戸歌壇と神田明神」、日本近世文学会平成 25 年度秋季大会、三重大学、2013.11.17
３）一戸渉、「和学者橋本経亮の享和元年」、第四一八回慶應義塾大学国文学研究会、慶應義塾大学、2013.11.2
４）一戸渉、「出府と蟄居－非蔵人橋本経亮の誤算－」、科研基盤研究（B）近世上方文壇における人的交流の研究　第３回人的交流研究会、岩瀬文庫、2013.3.2
５）一戸渉、「古典形成と出版―近世日本の書物メディアをめぐって―」、金沢大学人文学類シンポジウム「「古典」は誰のものか―比較文学の視点から―」、金沢大学サテライトプラザ 、2012.12.15
６）一戸渉、「周縁から眺める―上田秋成の門人研究」、2011 年度金沢大学国語国文学会、金沢大学サテライトプラザ、2011.10.1

〔図書〕（計３件）
１）一戸渉、「古典形成と出版―近世日本の書物メディアをめぐって―」、一戸渉・佐藤文彦共編『「「古典」は誰のものか―比較文学の視点から―』、金沢大学人文学類、pp43-54、2013.02
２）井上泰至・一戸渉・三浦一朗・山本綏子共編、『春雨物語』、三弥井書店、(「血かたびら」pp4-29「海賊」pp60-84「歌のほまれ」pp193-198 の校注・評釈及び参考文献一覧 pp270-274 担当執筆)、2012.04
３）一戸渉、『上田秋成の時代―上方和学研究―』、ぺりかん社、pp1-471、2012.01

６．研究組織

(1)研究代表者

一戸　渉（ICHINOHE, Wataru）
慶應義塾大学・斯道文庫・准教授
研究者番号：20597736